

の戦友を思うとき、半世紀も生かされていながら、何の報いることもせず、ざんきの念ひとしおです。願わくば、とこしえに世界の平和を祈りつつ筆をおきます。

シベリア抑留の思い出

広島県 田中 工

私は昭和十八年八月に召集令状を受け、小倉重砲第五連隊に入隊しました。これがすべての出発です。小倉には二日ほどいて、直ちに朝鮮經由で満州新京に至りました。そのときは既に物資が不足していたのか、銃もなく丸腰のままでしたし、到着するや、すぐチチハル第七十六部隊に配属を命じられました。総勢十五人で……。

チチハルでは、初年兵教育を三カ月受けました。兵舎は極めてお粗末で、土間の上に屋根がそのまま張ってありました。教育は厳しく、銃の手入れが悪いと言って一時間余りも「捧げ銃」をさせられたり、編み上

げ靴に土がついていたと言って、その土をなめさせられたこともあり、本当につらい三カ月間でした。

初年兵教育が終わると、「幹部候補生の試験を受けろ！」との命を受け、新京に戻り試験を受けパス。幹部候補生教育はハルビンの近くの「阿城」で十カ月、その間一度の外出もなく厳しい教育を受け、見習士官で原隊に帰りました。その後通化へ移り、間もなく敗戦。通化から平壤に移動することになり、鴨緑江を渡って朝鮮に入りました。

鴨緑江を渡るとき拳銃は川の中に投げ捨て、軍刀だけを持って平壤の町を歩いていたら、詰所のようなところから呼びとめられ、軍刀を差し出せと言われました。まだ敗戦気分はなく抵抗していましたら、周囲に大勢の朝鮮の民衆が取り囲み騒ぎ立てますので、仕方なく軍刀を手離しました。これで何も護身のものはありませんでした。

平壤郊外の「美祿洞」で天幕生活に入りましたが、ソ連兵が入っていました。この美祿洞で今でも忘れられない鮮烈な出来事がありました。

その日はラボーター（働き）のため五十名ほどが三名のソ連兵に警戒されていましたが、周りから地元民がたばこやリングを我々に買ってくれと言うので、二十二か二十三歳くらいの若い少尉が列を離れて、それを買おうとしたとき、ソ連兵の一人がマンドリン（機関銃の小型のものですが、引き金一度で七十発ぐらい連射できるもの。肩にかけているのでマンドリンと言っていた）を構えて何か言いましたが、少尉は知らぬ顔で地元民に近づいていきました。発砲の音と少尉の「お母さん」と言う一声が同時に響き、少尉はひっくり返りました。少尉の霊はいまだそのまま浮かばれないでいるでしょう。

これから入ソということになります。日本海側の興南港からソ連の船に乗せられて出港。ソ連の船員に手まねでどこに行くのかと聞きますと「ヤポン、ヤポン」ところが、着いたところはソ連でした。そこで約一カ月ぐらい天幕生活、その後二十日余り貨物列車。最も困ったのは便所。二十日余りの間で一度だけ洗面器一杯の湯で体を洗い、大変気持ちよかったのを覚えてい

ます。

目的の地らしい駅に下車したのが十二月下旬、既に酷寒の最中。四日間行軍してエラブカのラーゲルに着きました。

私は防寒靴がなく、ソ連からもらった靴の右足親指のところに穴があつたため凍傷になり、手術をされ入院。その約一カ月の入院中に、同じ友が毎日のように死亡していきました。ほとんどが栄養失調でした。

ラーゲルでの日々は、原木伐採、原木運搬と農耕でした。整列して人数を数えられるのに時間をとつたりの二年間ですが、相変わらず友は次々と死んでいき、きょうは何とか元気な自分が明日は？と思わせられながら昭和二十二年十月を迎え、いよいよ日本に帰れるという情報が入りました。でも、ほとんどの者は信じていませんでした。

それからしばらくして、本当に列車に乗せられ、進行方向が東の方だと判じられるようになって、ようやく今度こそ帰れるぞという気持ちになりました。二十日余りでナホトカに着きました。

ここでも忘れられない出来事がありました。それは、ある日、一同は広場の土の上に座らせられ、その周りを数人の日本人が取り囲みました。この人たちはソ連の共産主義に共鳴した人たちでした。我々に向かって共産主義に同調しろ、同意の者はその場に立てと、となります。もちろん立つた者は一人もいません。するとその者どもは腹を立て、「言うことを聞かないのなら全員ラーゲルに帰す」一人立ち、二人立ち、ついに全員仕方なく起立しました。

こんなこともあったが、希望の船に乗れました。もちろん日本の船でした。このあたりでようやく帰国が本当だという実感がわいてきました。船が出航、舞鶴まで何日たったか覚えていませんが、全員がほとんど眠っていないと思います。

舞鶴で五百円いただきました。もちとリンゴを買って食べた。そのおいしかったこと、今でも忘れることができます。

広島駅に着いて、また一驚、一面の焼け野原です。それが何のためとはわからないまま、乗り物が何もない

いので、一時間余り歩いて帰りました。

シベリア抑留記

福島県 小泉 与次郎

一 大正十四年六月八日出生 福島県田村郡船引町大字船引字南町通四十三番地

最終学校 県立郡山商業学校卒。卒業後、家庭用品書籍販売自営業に従事。

家族構成 六人。最終校卒業は昭和十七年三月二十五日卒。

一 昭和十九年十二月二十五日、現役兵として会津若松市東部二四部隊集合、雇用員として朝鮮羅南へ。

第一九師団第七六連隊第二中隊に配属となる。

一般歩兵、軽機班編入。一般正規の軍服着用。装備としては三八式歩兵銃、九九式歩兵銃、軽機関銃

(三八式)、擲弾筒。

一 ソ連軍の侵攻は昭和二十年八月九日夜十時。夜間